

チャランケ通信 第 111 号 2015 年 6 月 27 日

「チャランケ」とは、アイヌ語で談判、論議の意、「アイヌ社会における秩序維持の方法で、集落相互間又は集落内の個人間に、古来の社会秩序に反する行為があった場合、その行為の発見者が違反者に対して行うもの、違反が確定すれば償いなどを行って失われた秩序・状態の回復を図った」(三省堂『大辞林』より)

元参議院議員 峰崎直樹

来年度予算編成に向け、「骨太方針」の策定作業は進む。

来年度の予算編成に向けたフレームづくり作業が、大詰めを迎えようとしている。小泉政権時代には、存在感が高かったと言われている経済財政諮問会議の方は、来年度の予算編成の基本となる「骨太の方針」策定に向けて、最後の調整作業に入ったようだ。民主党政権時代に策定し、継承された目標である、平成 32 年度(2020 年度)までに基礎的財政収支を黒字化することと並んで、本来はそれ以降も肥大化した累積赤字の削減を目指すという財政健全化目標には手つかずのままである。



余りにも成長率の高い予測は、粉飾予算を生み出す。2018 年度

プライマリー赤字対 GDP 比 1% と言う数値は何なのか

何と、2020 年度までに基礎的財政収支の黒字化でさえも、事実上実現を放棄したのではないかと懸念され始めている。というのも、内閣府の比較的楽観的な経済見通しとして、今後 2020 年度までに名目 3%、実質 2% という成長率を前提に、租税弾性値を 1 とみて 2017 年 4 月からの消費税率 10% への引き上げは実施するものの、以降の消費増税は早々と実施しないことを安倍総理は表明している。内閣府の甘い経済予測でさえも、2020 年度には 9,4 兆円もの歳入不足が予想されており、いくら経済成長があったからと言って、税収の自然増に依拠する財政再建はあまりにも無責任でしかない。しかも、骨太の方針の素案の中身には、2020 年ではなく 2018 年に GDP 比 1% の赤字にまで圧縮

するという珍妙な再建策すら提示しているのだ。ここはしっかりとした責任ある財政再建目標を作るべく、最大限の努力を求めていくべきだろう。

毎年 5000 億円以上の社会保障費の削減、国民皆保険制度崩壊か

一方、経済見通しや歳入の拡大と並んで進められようとしているのが歳出の削減策であり、今のところ一番の標的にされているのが社会保障費への切り込みである。今の制度で行けば、毎年社会保障費の自然増は 1 兆円を超すと言われている。その自然増を毎年 5,000 億円の増に抑え込み(ということは、毎年 5,000 億円以上の削減になる)を目指そうとしており、今後の社会保障費をどのように切り込んでいくのか、大問題になりそうだ。と言うのも、かつての小泉内閣時代の 2006 年度の骨太方針の中で、毎年 2,200 億円の切り込みを 5 年間実施することを決め、初年度は何とか実施したものの、翌年度から 2,200 億円の削減は、事実上実現できなくなってしまった。野党が批判するのは当然のことであるが、与党であった自民党政権の中から、これ以上社会保障財源をカットすることは無理だ、と批判が増え、有権者の反発が高まったことが背景にあった。今度の骨太方針では、毎年 5,000 億円以上の削減が求められるとすれば、国民のセーフティネットはずたずたに引き裂かれてしまう事は必至であろう。来年の 7 月には参議院選挙を控えており、社会保障費の削減に対する批判の声は安倍政権を痛撃するに違いない。

低所得者層の自己負担の増加は、貧困家庭の増大を招いている

社会保障費の削減は、どのような影響を国民生活や日本経済に与えるだろうか。まず、国民生活の観点から見てみたい。今週の『エコノミスト』(6月30日号)で、古市将人帝京大学経済学部講師の「視点争点 財政の存在意義から考える財政健全化」と題する論文の中で、平成 13 年度の全国消費実態調査の個票データを用いた田中総一郎他 2 名の研究成果(「フィナンシャル・レビュー」115 号に掲載)から次のように引用している。

「医療・介護における自己負担額の所得に占める割合が低所得階層において高まっている点、自己負担の存在が利用者を貧困世帯にする確率を高めている」

所得が増えない中で、自己負担の増大の与える影響はまことに大きいものがあり、経済財政諮問会議の資料の中で提起されている「高額療養費制度や後期高齢者の医療の患者窓口負担については、年齢ではなく所得や資産などの経済力に基づき負担を求める仕組みに転換していく」ことや、「介護保険の自己負担上限や 2 割負担対象者の範囲」の見直しが盛り込まれている。ますます国民の私的負担の増大が企画されようとしており、小さい政府の下での脆弱な社

会保障のますます劣化が進むに違いない。保険制度とは名ばかりで、国民皆保険制度の崩壊へとならないことを祈るばかりである。

社会保障給付・負担に所得・資産による基準値を設定することは、市民社会の分断につながり、国民の連帯を弱める。再分配所得も含めた所得に対して、所得税の累進制の活用を図るべきだ。

見逃すことのできないのは、比較的「高」所得者・「高」資産保有者への年金の給付切り下げや医療や介護費用の自己負担率の引き上げが進められようとしていることである。ある所得に線引きが為され、それ以上と以下の方たちの間に市民社会が分断されようとしている。このようなやり方が進めば、社会保障の傘の中に十分入れない市民階層は、今後の社会保障を含んだ負担増を拒否していく危険性が高まるわけで、ただでさえ低下している国民の助け合いや連帯心の向上には結びつかなくなってしまふ。ここは、古市氏も指摘しているように、全ての再分配所得を所得税に合算して、税制の中で累進性を活用して高額所得者の方たちからは税負担を通じて再分配政策を強化していくようにすべきであろう。せっかくのマイナンバーの導入である、そのような活用の仕方こそ求められているのではなかろうか。所得税の課税ベースを拡大し、累進制度の活用を考えていくべき時である。

資産の正確な補足もこれからの課題であり、ピケティ教授が指摘するように累進資産税の導入に向けた準備も進めていくべきことは言うまでもない。所得格差・資産格差の拡大をどのように是正していけるのか、21世紀の大きな課題であろう。

岩井克人著『経済学の宇宙』（日本経済新聞社刊）は、実に興味深い論点が満載、是非一読を

最近読み終えた本の中で、興味深かったものとして紹介したいのは、岩井克人東京大学名誉教授の最新作『経済学の宇宙』（今年4月に日本経済新聞出版社刊）だろう。もっとも500ページ近い大冊であり、読み終えたなどと言えるような状態にはなく、ざっと眼を通したといった段階である。

岩井教授とは、今から5年前に教授が客員教授をされている国際基督教大学で、小生の高校時代の後輩である同大学の西尾教授の紹介で、大学の食堂で昼食をご一緒させていただいたことがある。その時、デフレの問題について、

岩井教授は「インフレターゲット政策が必要である」ことを強調されていた。確信を持ち、落ち着いた話ぶりが印象的であった。この『経済学の宇宙』を読み終えた今、マルクスも含め、いろいろな経済学の遍歴を知るにつけ、あらためてすごい経済学者だと思わざるを得なかった。

資本主義の利潤の源泉は何か、「差異があるから」と岩井教授

何が一番興味深かったのか、といえば、資本主義の利潤が出てくるのは「差異があるからだ」と主張されていたことについての分かりやすい解説であろう。

この点については、小生のようにマルクス経済学の方から入った者にとって、労働価値説に基づいた剰余価値を生み出す搾取論になじみ深いのだが、岩井説はその点について異なった見解を取っておられる。岩井教授はマルクス経済学についてもしっかりと学んでこられたわけで、貨幣論と並んでマルクス経済学の持つ問題点についてもなかなか厳しい。岩井教授は、以下次の3段階に分けて展開されている。すなわち、商業資本主義、産業資本主義、ポスト産業資本主義である。

商業資本主義段階は、「2つの市場の間の価格の差異を媒介にして

利潤を生み出す方法」=マルクスは「未発達な経済社会のみ存続、

近代以前の遺物」と見たのだが？

まず最初の商業資本主義、あるいは商人資本主義の段階においては、「二つの市場の間の価格の『差異』を媒介して利潤を生み出す方法」(189ページ)である。ただし、この「差異が利潤を生み出す」という利潤原理は、商業資本主義だけに通用する原理ではなく、あらゆる資本主義形態に共通する基本原理だと捉えているのだ。

マルクスは、こうした商業資本主義は、産業革命以前の経済的に未発達な経済社会においてのみ存続しうる近代以前の遺物、として捉えており、当然産業資本主義の利潤メカニズムとは異なるものと捉えていた。それではマルクスは、どのようにしてこの「産業資本主義」が利潤を生み出すと考えていたのか。

マルクスによる「産業資本主義で利潤はどう生み出せるのか」

労働力が剰余価値を創り出す神秘的な力を持ち、資本家の搾取へ

それは、資本家が労働者を搾取することによってであり、労働価値説によって、すべて物の価値はその生産に要した労働量によって決定されると主張し、

人間の労働力についてまで拡張し、労働力の価値とは労働力の再生産費に等しいとし、この労働力こそが再生産費以上の価値、即ち剰余価値を創り出す神秘的な力を持っているという結論を導くのだ。

一方産業資本家は労働力を商品として労働市場で買い取り、自分の工場で労働力を働かせ、生産したものすべてを自分の所有物として売りさばき、労働者が創り出した剰余価値は利潤としてすべて自分のものとなる、即ち搾取になるのだ、と説明する。

労働者が受け取る実質賃金=生存水準に近い、背景に農村過剰人

口=産業予備軍が存在、その枯渇が「ルイスの転換点」

ここで岩井教授は、労働価値説を労働力にまで拡張したことに言及し、それは労働者が受け取る実質賃金が生存水準に近い水準(労働力再生産費)であるという事を意味し、なぜこのような低水準の賃金率しか受け取れないのか、と疑問を呈する。(実質賃金の上昇こそは、次に述べる「ルイスの転換点」を過ぎたことになり、ポスト産業資本主義への移行に連なる)

そこで、アーサー・ルイスという著名な開発経済学者の「労働力の無制限供給と経済発展」と言う古典的論文を参照しつつ、産業資本主義において、労働者が低水準の実質賃金率でも工場システムで働くのは、農村に過剰人口が存在していたからであり、マルクスの言葉を借りれば「産業予備軍」の存在を上げている。

かくして、産業革命は、機械制工場システムの技術効率を飛躍的に上昇させ、働く労働者の生産性が実質賃金率を遥かに超える高さにまで上昇したのである。利潤とは収入から費用を差し引いたもので、収入の実質額を労働者一人当たりで計算すれば生産性であり、費用の実質額を労働者一人当たりで計算した値の大部分は実質賃金率が占めているわけで、かくして産業資本主義的な企業は、機械制工場を建設しさえすれば、農村から流入する安価な労働者を雇って、ほぼ自動的に大きな利潤率を手にすることができるようになったのだ。

産業資本主義でも「差異が利潤を生み出す」、ではその差異は何か

「労働生産性と実質賃金率との『差異』である」と、岩井教授

ここで岩井教授は、人間の労働力がマルクスの言うように剰余価値を創造する神秘的な力を持っているからではなく、やはり「差異が利潤を生み出す」と言う利潤創出の基本原理にあることを強調する。では、その差異とは何か。それは「労働生産性と実質賃金率との『差異』である」という。その点について

より詳しく次のように指摘する。

「労働生産性とは、企業の中で労働力一単位がどれだけの生産物に変換されるかを示す指標です。実質賃金率とは、市場の中で労働力一単位がどれだけの生産物(特に消費財)と交換できるかを示す指標です。共に労働力と生産物との交換比率なのに、前者の方が後者よりも大きくなっているのです」(194 ページ)

マルクス資本主義論の限界、農村離過剰人口が存在できる時のみ、

妥当する、先進各国は農村過剰人口の枯渇という限界へ

かくして、マルクスの資本主義論が持つ限界が明確になったことを指摘する、即ちマルクスが対象としている産業資本主義とは、農村における「過剰人口」の存在と言う、まさに「資本主義の不完全さ」に支えられている資本主義にしか当てはまらないからだという。

現実に 20 世紀の後半になると、いくつかの先進資本主義国において(日本は 1960 年代後半に転換点を迎えた)、農村の過剰人口がとうとう枯渇してしまったのだ。工場労働者の賃金水準が上昇し、何時かは労働生産性との差異を無くしてしまうはずである。産業資本主義の利潤創出の仕組みがそのままでは機能しなくなったわけで、先進国は相次いで資本主義の「転換点」に到達してくる。この「転換点」以降、資本主義が資本主義であり続けるためには「差異が利潤を生み出す」と言う利潤創出の基本原理を、意識的に作り出していかなければならなくなってくる。他の企業より効率的な技術、他の企業より魅力的な製品、他の企業が参入していない市場、他の企業とは異なった経営組織、即ち他との「差異」を意図して導入しなければならなくなっている。

ポスト産業資本主義では、意識的に「差異」を創りだしていく時代

へ、イノベーションの時代へ=早熟の天才シュンペーターに注目、

で岩井教授、ケインズ理論とはどうなったのですか

すなわち、「革新(イノベーション)」が必然化され事になる。これが、今我々の眼前で進行している事態なのであり、それを岩井教授は「ポスト産業資本主義」と名付けているのだ。これは、かつてシュンペーターが 28 歳の時に世に問うた『経済発展の理論』で明らかにしたイノベーションそのものであり、資本主義を発展させていくには意識的にイノベーションを創りだしていく以外にない。岩井克人教授は、シュンペーターの提起したこのイノベーションを意

識的に作り出す今のポスト産業資本主義こそは、最も純粹の資本主義の形態だとさえ言いきっておられる。マルクスの亡くなった 1883 年、その年に生まれたシュンペーターが描いたダイナミックな資本主義は、今後どうなっていくのか。1883 年生まれのもう一人の経済学の巨星であるケインズも、再び脚光を浴びる時代になろうとしているのではなかろうか。岩井克人教授のケインズ論についても、引き続き興味深く読みとって行きたい。